



神奈川県東ロータリークラブ

KANAGAWA EAST ROTARY CLUB

2016-2017年度 第23週報 No. 1959 2016年(平成28年) 12月16日 第1959回 例会記録 12月23日発行

本日(12月23日)のプログラム

移動例会「年忘れ家族会」

<<本日のBGM>>
アルバム「All Star Christmas」より



PHOTO 加野亮一 会員

司 会 白鳥 厚夫 副幹事

点 鐘 植田 清司 会長

斉 唱 「それこそロータリー」
ソングリーダー 河野 明光 会員

四つのテスト 横溝 亘 職業奉仕委員長
(第1例会のみ)

ゲスト紹介 木村 昌彦 様 (ゲストスピーカー)
鈴木 一男 様 (OWOP協会 会長)
横山 博行 様 (入会候補者)

ビジター紹介 横浜西RC 森部 等 様
横浜東RC 倉迫 益造 様

特別行事

◆井戸・トイレ建設費用贈呈



OWOP協会 会長 鈴木 一男 様

2016-2017年度 RI会長 ジョン F. ジャーム



第2590地区 ガバナー 高良 明

会 長 植田 清司	会 計 白井 康夫
会長エレクト 矢野 修二	副 会 計 河野 明光
副 会 長 西山 潔	S A A 田中 龍太郎
副 会 長 伊東 英紀	副 S A A 茂木 知子
幹 事 小山市 康	副 S A A 吉田 隆男
副 幹 事 白鳥 厚夫	クラブ会報 加野 亮一

例会日 毎週金曜日 0:30~1:30 PM (第5金曜日 6:00 PM)
例会場 ホテルキャメロットジャパン
URL <http://www.kanagawahigashi.com/>
E-mail kerc@beach.ocn.ne.jp

事務局 ホテルキャメロットジャパン内
〒220-0004 横浜市西区北幸 1-11-3
TEL: 045-314-3900 FAX: 045-314-3555
創立記念日 昭和 51年 5月 29日

会長報告

植田 清司 会長

・12月度定例理事会報告

幹事報告

小山 市康 幹事

- ・2月11日（土）開催ロータリーみなとみらいチャリティーマラソンの、参加賞提供のご協力をよろしくお願い致します。
- ・次週23日は年忘れ家族会です。30日の移動例会となります。1月6日休会、新年第1回目の例会は1月13日となりますのでお間違えないようよろしくお願い致します。また、事務局は12月26日～28日、1月3日～5日までお休みさせていただきます。

出席報告

但野真実子 出席委員長

会員総数	50名	(30+20)名	
出席会員数	35名	(22+13)名	
出席率	81.40%		
ゲスト	3名	ビジター	2名
前回補正後	85.71%	前々回補正後	93.48%

スマイルボックス

茂木 知子 副SAA

横浜西RC 森部 等様 月山様、お世話になります。

横浜東RC 倉迫益造様 神奈川東ロータリークラブ様のご発展をお祈り申し上げます。本日は、よろしくお願い申し上げます。

植田清司君 ①木村昌彦様、本日の卓話、よろしくお願い致します。②鈴木一男様、ようこそおいで頂きました。③横山博行様、どうぞゆっくり例会を楽しんで下さい。

石川正三君 公開卓話と川柳の会にご出席の皆様、ご苦労様でした。期待した卓話、チョッと舌足らずで恐縮でした。

山本 登君 いよいよ年末。

加藤仁昭君 本日の卓話、木村先生楽しみにしております。

第一テーブルミーティング マスター 森永 健君 第一テーブルミーティング会費のお釣りを一部入れさせていただきます。

茂木知子さん ～SAA、副SAAの反省～例会で、SAA、副SAAの役目を果たしていないとお叱りを受け、対策を考えました。田中SAA・・・ゴルフクラブで突っつく（ウッドかアイアンかはその時の気分次第）、吉田副SAA・・・おひねりを渡す（コインかお札かはその時の中身次第）、茂木副SAA・・・鎮静剤、筋弛緩剤の注射（有無を言わず）

12月16日	8件	19,120円
本年度累計		965,488円

「勝利至上主義から勝利追求主義への転換 ～リオオリンピックから考える～」

横浜国立大学 教育人間科学部 教授 木村 昌彦 様
(紹介者 加藤 仁昭 会員)



●戦うために必要な事（準備万端・用意周到・総合力）

スポーツに限らず物事にあたるには準備・用意が重要だと思う。そして直前にはすべてを想定した再確認が重要である。さらにリオへ向けての大きなテーマは「総合力」であった。

今回に限らずオリンピックの場は様々な「気付き」そして「学び」ができる場だと痛感している。身近な場面にも同様の「気付き」や「学び」があるが、より大きな衝撃を受けるのがオリンピックである。

大舞台になると必ず言われる言葉は「メンタルが弱かった」「気合で負けた」「プレッシャーに負けた」等をよく聞く。指導者も選手も必ず口にする言葉である。

しかし、勝利を収めた時は精神的な強さを賞賛されるが、敗れた時は精神論に頼り過ぎだとかメディアに非難されることが多い。

2012年のロンドンオリンピックでは柔道は過去最低の結果であった。当時の篠原監督は「最も充実したチーム」、「柔道再生へ向けて篠原の挑戦」などと囃し立てられていたが、金メダル0個に終わった瞬間に「屈辱的な結末、横行する根性論」などと一斉にバッシングされた。敗戦の責任を負うのはリーダーの務めであるが精神面（メンタル）は都合の良いように善悪の対象になることが多い。つまり勝てばメンタルトレーニングの効果、負ければ根性論に頼った非科学的な指導になることが多い。

しかしながら、これまでの結果や体験的にスポーツ場面においてメンタルの強さが必要な事は認識されている。

●自己判断できる選手

男子柔道が柔道オリンピック史上初めて金メダル0個に終わったロンドンオリンピック時の反省・検証では自己判断できる選手の育成が急務と言われた。戦う場は最終的には一人であり、様々な課題を自ら解決しなければよい結果は生まれない。強制的な指導で受動的な選手では最終的に実力を発揮できないという反省・検証であった。では自己判断できる選手とはいったいどのような選手だろうか？

●リオへ向けた男女強化方針＝自立・自律（女子監督）、最強かつ最高の選手（男子監督）

男女ともにハードな練習をこなすだけの強化ではなく人間力を基盤として総合的な強化方針を打ち出した。

●勝利至上主義から勝利追求主義へ

リオオリンピック中継では評論家諸氏が柔道の選手は何故金メダル以外では笑顔を見せないのか？何故謝るのか？「勝利至上主義だ」、「金メダルの呪縛から解放しろ」等のコメントをしていたのを現地そして帰国後に視聴した。

そのTVを見て声を大にして伝えなかったのは「そうではない！私達は勝利至上主義ではなく勝利を追求する集団です」と言う事であった。

前述した男女監督の掲げた究極の目標は勝利を目指すだけでなく勝利を目指していく過程を今後の人生や人格形成に活かすことであった。つまり選手には単なるWinnerではなく社会においてもChampionになって欲しいという希望を持っている。

ロータリーニュース

国連ロータリーデー ビジネスと社会貢献の接点をさぐる

マンハッタンのミッドタウンにある国連本部。そのビルの外には、片手に剣、もう片手に槌をもった力強い男性の彫刻がそびえ立っています。これは「持ちうる強みと手段を使ってより平和で公平な世界を築く」という、ロータリーと国連の共通目標を象徴しています。

11月12日（土）、国連とロータリーが毎年開催している「ロータリーデー」が、ここ国連本部で開かれました。

今年のテーマは「責任あるビジネス、回復力ある社会」。このテーマは、職業の手段をより良い地域づくりに生かしているビジネスリーダーの世界的ネットワーク、ロータリーの役割を映し出しています。

イベントでは、このテーマをめぐる分科会と講演が行われました。

冒頭の挨拶で、国際ロータリーのジョン F. ジャーム会長は、前述の彫刻に触れ、「戦いをやめて平和な世界をつくらうではありませんか」と呼びかけました。テーマである「責任あるビジネス」は、営利組織が社会的・経済的発展に貢献できるという哲学を表しています。

「これこそ、国連と国際ロータリーが緊密に連携できる分野。地域社会が必要な手段を備え、この手段を広く活用できるよう、地域社会のエンパワメントを支援できます」と会長は述べました。

オスロを拠点とするBusiness for Peace Foundation（平和のためのビジネス財団）の創設者で、同財団の理事長を務めるパー・サクセガードさんが、ビジネスと社会の複雑な関係について講演し、この関係がもたらす緊張と機会について語りまし

た。「企業の動機は営利だけ」という考え方がある一方で、商業的成功と社会的進歩は緊密に絡み合っていると、サクセガードさんは述べます。

「市場を決めるのは、社会のニーズ。（中略）私は仕事で多くの起業家に会いましたが、全員に共通点がありました。彼らは問題を見ると、“この問題は解決できる。しかも、もっと安価かつ効果的な方法で”、と考えます。これこそが、ビジネスにおけるイノベーションの原動力です。

現在の問題、例えば、飢餓や非識字といった問題の解決に必要なのは、この原動力なのです」。2030年までに貧困をなくすという国連の「持続可能な開発目標」にも触れ、この目標の達成におけるビジネスの役割を強調しました。

このほかに、国連事務次長で軍縮担当上級代表であるキム・ウォンスさんと、ユニセフのポリオ担当責任者であるレザ・フサーニさんが講演しました。

イベントでは、責任あるビジネスの表彰も行われ、国際ロータリーのジョン・ヒューコ事務総長がビジネスリーダー6人と企業パートナー2社を紹介しました。いずれも、雇用、メンタリング、教育、イノベーションといった分野で地域社会に貢献する包容的ビジネスを推進しています。

表彰されたロータリー会員：

・ファン・シルバ・ボーパトゥイさん（ベネズエラ、チャカオ・ロータリークラブ）：ボーパトゥイさんが経営するエンジニアリング会社は、25年間、「Queremos Graduarnos」という教育プログラムを通じて、貧しい青少年たちを支援しています。現在、このプログラムは18の学校、700人以上の学生を支援しています。

・ジャン-ポール・フォーレさん（フランス、カーニュ-グリマルディ・ロータリークラブ）：若い職業人のモチベーションを高め、将来有望な新ビジネスの研修を行い、資金を提供することを目的として、フォーレさんは「ロータリートロフィー（Le Trophée du Rotary）」と呼ばれるビジネスコンテストを立ち上げました。今年で7年目となるこのコンテストは、大手銀行からのサポートも得ており、過去の参加者はアドバイザーとして協力しています。

・スレッシュ・ゴクラニーさん（インド、ボンベイ・ロータリークラブ）：UV浄水システムの大手製造会社副会長であるゴクラニーさんは、国内の僻村と都市部の貧困地域にきれいな水を提供する取り組みを率先して行ってきました。また、女性たちが収入を得るために水を売ることのできるセンターも設置しました。

・アンヌマリー・モステールさん（南アフリカ、サウザーニアフリカ・ロータリークラブ）：教育と職業研修を通じて女性と青少年に起業とリーダーシップを教える非営利団体「Sesego Care」を2005年にヨハネスブルグで設立。さらに、全国の70クラブを動員して130万人の貧しい人びとに靴を提供するため、「TOMS Shoes」とも提携しました。

・ステファニー・ウーラードさん（オーストラリア、メルボルン・ロータリークラブ）：ネパール訪問時に会った工芸家7人が読み書きができないことを知ったウーラードさんは、「Seven Women」を設立し、ネパールの女性たちが海外に製品を売るための支援を行っています。過去10年間に1,000人以上の女性を研修、雇用したほか、基本的な帳簿管理とパソコンスキルも教えています。

・ラリー・ライトさん（米国、テイラー・ロータリークラブ）：1970年代に銀行から融資を受けて造園業を開業したライトさんは、2013年、経済破綻したデトロイトの起業家たちを支援するために、海外で成功している「マイクロファイナンス」モデルを採用した取り組みを開始。小口融資の提供に加え、事業経営のクラスやアドバイスも行っています。

表彰された企業パートナー：

・コカコーラ・パキスタン：2010年以來、予防接種とポリオ認識向上のためにロータリーのパキスタン・ポリオプラス慈善信託を支援し、特に広報面で大きく後押ししています。また、きれいな水の提供にも協力しています。

・メルカンティ・バンコ・ユニベルサル：同銀行は、ベネズエラ国内の40の大学、6,000人の学生を対象に、社会的責任とリーダーシップについて研修するプロジェクトを支援しています。このプロジェクトの目標は、大学で学んだことを、恵まれない地域のニーズ解決に生かすことを奨励することです。

この日の午後には、ロータリー会員デヴィン・ソープさんが、営利事業と目的意識のかかわりについてスピーチしました。ソープさんは、企業活動に社会貢献を組み入れることで、顧客と従業員にロイヤルティ意識と満足感が生まれると述べました。「目的意識が営利をもたらすものである場合、そこから素晴らしいことが生まれ、可能性は無限に広がります。企業とは人の集まりです。今日ここにいる私たちは、企業の行為を形づくる責任を担っています。それは、私たち一人ひとり次第なのです」

ロータリーニュース

抜粋：第11章「お金だけではない価値」

2016-17年度はロータリー財団100周年年度です。財団は、世界中の地域に変化をもたらしてきたロータリアンの活動を、1世紀にわたって支援してきました。

今年度、財団100周年記念誌『世界でよいことをしよう：人びとの心に触れた100年』からの抜粋を紹介しています。

以下は、第11章「お金だけではない価値」からの抜粋です。

1944年、ポール・ハリスは、存命中は収益を自分へ、没後は妻のジーンへ、ジーンが亡くなった後は、残高すべてをロータ

リー財団へ送るという公益信託を創設した。1964年にジーンが亡くなると、この遺贈を受けた財団管理委員会は、ハリスの遺志を継いで、恵まれない子どもたちの教育にこの資金を役立てている。

支援する財団プログラムを指定し、敬愛する人の名を冠した寄付をする人もいた。オーストラリア出身のロータリアンとして初めてロータリー会長（1948-49年度）に就任したアンガス・ミッチェルは、その伝統を始めた一人である。ミッチェルは1949年、オーストラリアの学生を支援する奨学金を設立し、妻の名前を取って「ティニー・ロバートソン・ミッチェル・メモリアル・フェローシップ」と名づけた。これが長い伝統となり、今日まで続いている。

イタリアのブルーノ・ギージは、リミニ・ロータリークラブ会員であった父親を偲んで何かしたいと考えていた。父からいつもロータリーの素晴らしい活動を聞いて育ったギージは、学校を出て家業を手伝い、後に自らソフトウェア会社を設立。これがイタリアで大手の会社に成長して成功を収め、自らもロータリーに入会して、クラブ会長に就任、その後ロータリー財団メジャードナーとなった。1988年、父親の没後20周年を機会に、35万ドルをロータリー財団に寄付し、これをアフリカとブラジルの難民や病気の子どもたち、またストリートチルドレンを助けるための冠名基金とした。

財団の慈善活動の恩恵を受けた人の中には、ほかの人も同じ経験ができるように、恩返しに寄付をする人もいた。例えば、ロータリー財団の初代奨学生の1人であった緒方貞子氏は、大学生のときに受けた奨学金に対する感謝の印として、後に財団へ1万ドルを寄付した。「私が今の道を歩んでいるのは、ロータリーのおかげです。国際親善奨学生としてアメリカに渡らなかつたら、国際関係を学びたいと志すことはなかつたでしょう」

リヒャルト・イルゲン氏は、ドイツ、マインツからの国際親善奨学生として、米国イリノイ州、エバンストンのノースウエスタン大学でビジネスと経済学を学んだ。卒業後はクラフトフーズに入社し、そこで輝かしいキャリアを築くと、ほかの人にも自分と同じような奨学金の機会を提供したいと考えるようになった。イルゲン氏は、イレーネ夫人とともに寄付を決め、クラフトフーズからの上乗せ寄付も確保して、計23,000ドルを提供。この寄付で、ドイツの地区からノースウエスタン大学に留学する奨学生1名を支援した。

デイビット C. フォワード

◎12月30日（金）⇒ 23日（金）移動例会
◎1月6日（金） 休会

次回〈1月13日〉の予定

新年挨拶

会長、副会長、幹事、会計